

## 教育講演「出雲地方の医学史・洋学史」

## [教育講演 1]

## 出雲国の医学

梶谷 光弘

公益財団法人いづも財団

出雲国の医学を語る際、天皇の命によって、国家の安泰を祈ることを目的として建てられた杵築大社(1871年から出雲大社が公称)とその司祭者である出雲国造家を抜きにしては語ることができない。

『古事記』や『日本書紀』では、わが国の医療神として大国主神と少名毘古那神が知られている。大国主神は現在、出雲大社(千家国造家)の祭神として祀られ、また、大火傷を負った彼を救った蛸貝比売と蛤貝比売は、出雲大社本殿の横に建っている神魂伊能知比売神社(天前社)に祀られている。そして、少名毘古那神は出雲大社北島国造館の天神社に祀られている。

『出雲風土記』(733年成立)には延べ259種、総種類86種の薬草が記載され、その数の多さは『播磨国風土記』『常陸国風土記』などとは比べものにならない。また、『大同類聚方』(808年成立)には「出雲方」「出雲薬」「大国主大神方」「少彦名方」「大己貴方」など、出雲国に関わる薬方が数多く記載され、なかでも出雲国造家家伝の薬方が目をひく。最後の章にある「神戸薬」も国造家の処方であり、そこには『古事記』に出てきた火傷の処方「支差加比(キサガヒ)」が見られる。

こうして、古代の出雲国は医薬の国として存在し、その中心的な役割は出雲国を鎮守する杵築大社と出雲国造が担っていた。その後、康治2(1143)年の官宣旨によって杵築大社は「国中第一の霊神」と称えられ、国造が鎌倉幕府の御家人となったため、宗教的・政治的に不動の地位を築いた。

一方、中国山地から産出される鉄は杵築商人の手を経て宇龍の港から積み出されており、多くの北国船、唐船が来航した。そのため、明の地理書『籌海図編』(1562年成立)には「戸流」(宇龍)や「欽築溪」(杵築)などの記載があり、中国にもその名前を知られていた。そして、大永6(1526)年に再発見された石見銀山によって海外との新たな交易が盛になると、マドリッド国立文書館所蔵の1587年の史料には、隣の石見国へポルトガル人が銀を求めてたびたび来航していた記録があり、日本海を舞台にして杵築は商業都市としても繁栄した。

当時の古医書としては、曲直瀬道三の門人と思われる清安斎恵心が岩崎宗右衛門へ伝授した『七表陽脈主属之図』(1585年)・『宜禁集』(1586年)、酣韶夕庵の孫門人真乗坊が宗右衛門へ伝授した『眼病』(1585年)、「慶長壬子(1612年)仲秋於雲州塩氏平宣政開版」の刊記をもつ古活字版『医方大成論』などが出雲市岩崎家に所蔵されている。これらは中世末から近世初期にかけての明版中国医書であり、出雲国の医師が積極的に中国医学を受容しようとしていたことが窺われる。

ところが、永禄の初年、明に渡り7年間にわたって杏林周から鍼術を学び、秘術を究めて帰国して『刺鍼家鑑』などを著した大社の神職吉田意休については、「国造北島氏支配屋敷目録」などに「意休」、「寛永三年 杵築御検地帳」に「喜庵」の号が確認できるが、それらが吉田意休・喜安(庵)親子かどうかは断定できていない。

出雲国は、寛永15(1638)年、それまでの堀尾氏(1600年～)、京極氏(1634年～)にかわって松平氏が封じられ、以後、10代松平定安の時に明治維新を迎えるまで約230年間続いた。

杵築大社では、天正19(1591)年、豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して陣夫を差し出すことを拒否したため社領を半減された。そのため近世に入ると、御師を中心として、出雲信仰を広めようと布教活動が積極

的に行われるようになった。御師は檀所の人々と良好な関係を築くため、歌の教養によって尊敬を集めながら神府の授布や祈禱を行い、なかには家伝の「安痘円」「神功丸」などの薬を調合して贈る者もいた。

それを裏付ける事実として、平成20(2008)年から始まった出雲大社平成の大遷宮の一環として大社文庫(1667年の遷宮で建設)の改修工事が行われた際、庇床下から『傷寒論』太陽病の一節が彫られた束石が発見された。これによって、大社の神職が数多くの神事を執り行うとともに、中国の古典医学を学び、薬の調合に精通していたことが明らかになった。

そして、江戸時代後期になると、西依成斎、内山真龍、本居宣長や江戸の林家で学んだ出雲国造第75代俊勝の次男千家俊信(清主, 1764-1831)を中心として、桓武天皇の遺命によって平城天皇の大同3年に完成・上奏された『大同類聚方』の研究が盛んに行われた。

それを実証する写本100巻が、松江藩医田代家と出雲国造千家家に所蔵されていた。

寛永18(1641)年、曲直瀬道三の師であり、わが国へ初めて李朱医学を導入した田代三喜の実兄江春(2代)の曾孫更幽(5代)は、松江藩初代藩主松平直政に医師として登用された。更幽の孫江庵(7代)には二人の男子がおり、長男元春(8代)は伯州米子において松平相模守に召し抱えられ、次男元閑は松江藩に仕えた。米子にいた元春の子露岳(9代)は京都で医学修業した後、本居宣長に入門して国学を学び、同門の衣川長秋とともに『大同類聚方』100巻を校合した(田代本)。

長秋は『田蓑日記』の中で俊信を「学びの兄弟」と言い、俊信は上京のたびに長秋の許を訪ね、文政元(1818)年には長秋が杵築にやって来るほどの仲であった。

田代家所蔵の『大同類聚方』100巻は、取氏(15代)から島根大学附属図書館医学分館へ寄贈され、所蔵されている。

もう1組は、『千家国造館書籍目録』(明治18年)に「大同類聚方 箱入」とあり、出雲国造千家家に所蔵されていたものである(千家本)。ここには「箱入」と記載されるのみで巻数は書かれてない。しかし、杏雨書屋や東北大学狩野文庫に所蔵される『大同類聚方』(写本)の巻末には、「大同類聚方一百巻 出雲国大社 出雲国造千家宿祢清主家珍重之古写本也」と記されていることから、100巻だったことがわかる。また、千家国造館にはこの他に『医心方』『医方大成論』や『大同類聚方人名録』『同業名集』『大同類聚方正訓』『同神名論』『大同類聚方一卷目録』なども所蔵され、このうち『大同類聚方人名録』は、神職で俊信門人だった中臣正蔭が校訂していた。

このことから、俊信は早くからわが国の古典研究の対象として『大同類聚方』に着目し、自らが開設した私塾梅廼舎において、神職をはじめ武士や医師らに対して『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』の他に『大同類聚方』を通して国学を講じていたものと考えられる。

こうして、出雲国造家に生まれた千家俊信は、国学を深く研究するために『大同類聚方』を蒐集・校合していたのである。

梅廼舎で俊信に学んだ後に華岡青洲、そして湊長安を通じてシーボルトに学び、1826年4月18日(和暦では文政9年3月12日)に蘭文修業証書を授与された西山砂保は、梅廼舎門人として代表的な存在だが、松江藩から藩外へ学問・医学修業した人物は松平治郷や千家俊信の時代から急増した。それも医学塾への入門が漢学や国学の私塾を大きく上回っていた。また、松江藩における寺子屋の経営者は、神官・神職(19.2%)、医師(14.3%)の比率が高かったことに加え、学制発布直後に開校した旧島根県の63の小学の教師には医師が多く、教育史において医師が果たした役割も興味深い。